

(PDF版・2の10) 『教会教義学 神論 I / 1 神の認識』 「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」 「二 人間の前での神」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」 「二 人間の前での神」 (55-114 頁)

「二 人間の前での神」

「われわれは、今、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての〕神の啓示に基づくわれわれの神認識の<制限された姿>、したがって、信仰という方法によるわれわれの神認識の<制限された姿>、「神によって意志され、手配され、<規定された姿>の本質について、なおいくつかのことを原則的に明らかにする……」(この詳細は、<(PDF版・2の9) 『教会教義学 神論 I / 1 神の認識』 「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」 「二 人間の前での神」>を参照されたし)。

(2) 「われわれは、われわれがなす神認識は〔すなわち、われわれが、神のその都度の自由な恵みの神的決断によるイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>の中での客観的な「存在的なく必然性>」としてのその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」と主観的な「認識的なく必然性>」としての「その啓示の出来事の中での主観的側面」としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて与えられる信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事に依拠して、客観的な「存在的なくラチオ性>」としての三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性としての「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」(換言すれば、聖霊自身の業である「キリスト教に固有な」類と歴史性)の関係と構造(秩序性)と主観的な「認識的なくラチオ性>」としての徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性によってなす神認識は〕、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての「神が、三位一体の神としてのその自己認識の真理性の中で〔すなわち、「自己自身である神」としての「ご自身の自己認識」、自己理解、自己規定の真理の中で、「神の領域の中での神ご自身の真理」の中で、神がご自分を「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の<内>三位一体的特殊性」・「三位相互<内在性>」における「失われない単一性」・神性・永

遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」であると自己認識、自己理解、自己規定した内的な真理の中で、神がご自分を「自己自身である神」としての「三位一体の神」の根源・起源としての「父は、子として自分を自分から区別するし、自己啓示する神として自分自身が根源」であり、それ故に「その区別された子は、父が根源であり、神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊は、父と子が根源である」と自己認識、自己理解、自己規定、自己証明した内的な真理の中で、われわれに対し、ご自身を認識するよう与え給う時〔すなわち、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体においてご自身を認識するよう与え給う時）〕、神は、その被造物のうちのどれか一つのものの中で、換言すれば神によって造られた世界の空間と時間の中で起こる出来事の中で、ただ神がご自身の中で〔すなわち、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互〈内在性〉」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の中で〕、ご自身にとって現にあるところのもの〔すなわち、現に「自己自身である神」としての「三位一体の神」の根源・起源としての「父は、子として自分を自分から区別するし、自己啓示する神として自分自身が根源」であり、それ故に「その区別された子は、父が根源であり、神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊は、父と子が根源であるところのもの〕であり給うだけでないということ、すなわち〈われ〉、永遠的な、起源的な、比較を絶した〈われ〉であり給うだけでないということ、まさにそのようなものとして、その上にいかなるほかの主もないところの主であり給うだけでないということを受し給うということ〕を、「明らかにする時に、さらに正確に理解することができる」。詳しく言うならば、神は、ご自身をわれわれに対し認識するよう与え給う時、「次のような主体で……あり給うだけでないということを受し給う」——すなわち、神は、「すべてのそのほかの主体に対して先行し」、「すべてのそのほかの主体は、ただその客体である……だけである主体であり給うだけでないということを受し給う」。「神は、ご自身の中で、ご自分にとって、**客体であり給う**〔すなわち、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位一体の神」の根源・起源としての「父は、子として自分を自分から区別するし、自己啓示する神として自分自身が根源」であり、それ故に「その区別された子は、父が根源であり、神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊は、父と子が根源であり給う〕〕。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神は、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対

他的な完全に自由な「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の根源・起源としての「父が子によって、子が父によって認識され給う認識のあの分けられない単一性の中で、したがってまさにその永遠の除去することのできない主体性の中で、客体であり給う。しかし、その啓示の中では、神は、〈ただ単に「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」としての〕われ〉であり給う〈だけではない〉〔すなわち、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質）の中だけでは、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体の中だけでは、キリストにあつての神としての神は、「〈ただ単にわれ〉であり給う〈だけではない〉」〕。「そうではなくて、〔自己自身である神〕としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な「三位一体の神」としての〕神は、理解を絶した仕方でそのような神の〔われわれのための神〕としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）における〕外が存在することによって、〈汝〉および〈彼〉として〔〈汝〉および〈彼〉という対象として〕認識され給う。換言すれば、多くの汝および彼が、さらにそれを超えて無数のそれが認識されるように、またわれわれの認識の対象として特徴づけられている実体が認識されるように、すなわちまさにそれらに対してわれわれが名を与えることができ、それらをその名を手がかりにしてわれわれが直観と概念を用いて把握できる事物の世界から区別し、それらを同時にこの世界の中に編み入れることができることによって、被造物として、そのようにしてわれわれがそれらに対して語り、聞き、それらについて語り、聞くことができるわれわれの認識対象として特徴づけられている実体が認識されるように、〈汝〉および〈彼〉として認識され給う」。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神の啓示とは、神が、〈われわれに出会い〉給うということである〔すなわち、神の啓示とは、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位一体の神」の、「われわれの神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方、外在本質、起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父——「啓示者」・言葉の語り手・創造主、第二の存在の仕方である子としてのイエス・キリスト自身——「啓示」・語り手の言葉（起源的な第一の形態の神の言葉）・和解主、第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊——「啓示されてあること」・起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・

キリストを起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済主なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体において、「神が、〈われわれに出会い〉給うということである」]」。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているイエス・キリストにおける神の自己「啓示の中での神のあの自己卑下と自己疎外化」
〔「神の隠蔽」としてのイエス・キリストの人間性、その内在的本質である神性の受肉ではなく、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における言葉の「受肉、神が人間となる、僕の姿、自分を空しくすること、受難、卑下」〕が何を意味しているかということは、ここからしてはじめて全く明らかになってくる——この「神の自己卑下と自己疎遠化は、既に、〔その外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方における〕外ニ向ッテノ働きは、……創造主なる神の意志および行為と共に始まる」。

第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神は、いかなる被造物をも必要とし給わない。神は、自分自身にとって対象であり給う」〔「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位〈内在性〉」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」は、自分自身にとって対象であり給う〕。「いかなるそのほかの対象も、神に対して、神がご自分に対して対象であり給うような仕方ではあり得ない」。「ましてや、神は、そのほかのどんな対象から見ても、ちょうど神が認識するものと認識されるもののすべての以前と以後なしに、自分自身に対し対象であり給うように、換言すれば父が子に対して、子が父に対して、神ご自身の神的な対象性の永遠的な除去されない主体性の中で対象であり給うように対象であることはできない」——「まさにこのことこそが、啓示と啓示に基づいている神認識の实在である。すなわち、神は、ただ単に神とは違う世界を創造されただけではない……ただ単に神ご自身とは違う諸対象（神が認識し給う認識の諸対象）を持ち給うだけではない。神は、〈またご自身〉、それらの神ご自身によって造られた神の諸対象から見て〈对象的となり給う〉。神とそれらの諸対象の間には相互関係が成り立っている」。「そして、人間は、〔「われわれのための神」としての〕神の啓示を通して、その相互関係を実証し、したがって〔「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由な「三位一体の」神を、……ご自身の中でただ全く純粋に〈われ〉であり給う方を、あたかもその方自身、〔「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方において〕人間であるかのように〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて〕知覚し、直観と概念を用いて把握することへと定められ、召さ

れ、能力を与えられるのである」。「そして、それを通してあの相互関係が表示される<手段>、あの相互関係がまた人間を通して実現されるように、その中で、神ご自身があの相互関係を実現し給う<粹>、そのような手段および粹こそが、まさに聖礼典的な<実在>であり、人間イエスの現実存在と共に始まった造られた世界の中での神の自己証言〔・自己証明〕の業およびしるしである」——「この<聖礼典的な実在>の手段を通して〔すなわち、区別を包括した単一性において、先ず以て、「第二の問題」である「神の本質を問う問い」（「神の本質の問題」）を包括した「第一の問題」である「神の存在と問う問い」（「神の存在の問題」）を要求するイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、聖礼典的な実在としての「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（神の顕現）してまことの人間（神の隠蔽）イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>を通して〕、自分自身を証ししつつ〔自己証言、自己証明しつつ〕、また〔神の隠蔽として〕自分自身を覆い隠しつつ、神は、〔神の顕現として〕人間に対し姿を現し給う」。「語りかける者、そして再び語りかけられるべき者であるわれわれに向かって『汝』と語りかけ、またわれわれの方でもその方に向かって『汝』と語りかけることがゆるされるところの……まことの彼である神が、その方が、……その手段を任命し用いられることが確かである限り」、「その方が、まさにその手段を通してその神的な支配を実証されることが確かである限り」、「われわれがもはやまさにその方がその手段を持ち給うことによって、……そのことをなすその方は、最高の、一人の、本来的な神であるのかと問うことができないことが確かである限り」、「まことの彼、神が、ご自分を<われわれに対して>証し〔自己証言、自己証明〕されることによって、したがって<外>に向かってご自身を証し〔自己証言、自己証明〕されることによって、その方が〔すなわち、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位一体の神」が〕、ご自身を知り給うのとは違った仕方〔すなわち、「ご自身の自己認識」、自己理解、自己規定の真理、「神の領域の中での神ご自身の真理」、「内的な真理」として、ご自身を知り給うのとは違った仕方〕、しかも決して違った方としてではなく、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）において〕われわれに対して、また外に向かって、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいて〕ご自身を証し〔自己証言、自己証明〕されることによって、人間に対して姿を顕わし給う」。「その方が、〔「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つ

の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）において〕われわれに対して彼として、また汝として＜明らかになる＞ことによって、〔「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位一体の神」としての〕われとして、それと共に、まさにその方が神であることの存在と本質の中ではなく隠れた＞ままであるという仕方で、その方を〔その顕現性と隠蔽性の中で〕認識する。「われわれの神認識のこの限界は、見て取られ・注意されることを欲している」。

「われわれが、〔「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）としての〕彼および汝として認識するところの方は、そのようなものとして、ただご自分にとってだけ知られているわれであり給う〔すなわち、ただ「ご自身の自己認識」、自己理解、自己規定の真理、「神の領域の中での神ご自身の真理」、「内的な真理」としてご自身を知り給う、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位一体の神」としての＜われ＞であり給う〕。「確かに、われわれは、神ご自身を、神ご自身によって造られた相互関係に基づき、そのような相互関係の形で認識する」。言い換えれば、先ず以て、常に先行する「神の用意」に包摂された後続する「人間の用意」ができていているところの、「人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一」（『ローマ書』）であり、「永遠の（神との人間の）和解」（徹頭徹尾神の側の真実としてのみある、神の側からする神の人間との架橋）であり、「神との間の平和」（ローマ五・一）であり、それ故に神の認識可能性である「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（神の顕現）にしてまことの人間（神の隠蔽）イエス・キリストにおいて、「神の用意の中に含まれて、人間にとって、神に向かつての、したがって神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕に向かつての人間の用意が存在する」。区別を包括し単一性におい

て、先ず以て、「第二の問題」である「神の本質を問う問い」（「神の本質の問題」）を包括した「第一の問題」である「神の存在を問う問い」（「神の存在の問題」）を要求するイエス・キリストの神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、「確かに、われわれは、神ご自身を、神ご自身によって造られた相互関係に基づき、そのような相互関係の形で認識する」。「しかし、そのわれである姿の中ででは〔すなわち、「ご自身の自己認識」、自己理解、自己規定の真理、「神の領域の中での神ご自身の真理」、「内的な真理」としてご自身を知り給う、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位一体の神」としての「そのわれである姿の中ででは」、**神のその相互関係から、したがってわれわれの認識から身を引き給う**」。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位一体の神」が、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）において、「ご自分をわれわれに啓示し給うことによって」、「神が、そのみ子の中で自ら人間になり給うことによって〔すなわち、その内在本質である神性の受肉においてではなく、その「外に向かって」の外在的な第二の存在の仕方における言葉の受肉において、「そのみ子の中で自ら人間になり給うことによって」〕、「神であることをやめ給わないことが確かである限り」、「彼、万物の上にあります主が、ご自身をわれわれに対して、イエス・キリストの人間性の中で認識するよう与え給うところの方であることが確かである限り」、「われわれは、彼を、彼がわれわれを認識し給うようには認識しない〔すなわち、われわれは、彼を、その顕現性と隠蔽性において認識する〕。〔それ故に〕……彼を、われわれが人間がお互い同志認識し合うような仕方で認識しない」。言い換えれば、われわれは、彼を、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉——すなわち客観的な「存在的なく必然性〉」としての客観的なその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」と主観的な「認識的なく必然性〉」としてのその「啓示の出来事の中での主観的側面」としての「復活され高擧されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による主観的な「信仰の出来事」を前提条件とした（換言すれば、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいた）客観的な「存在的なくラチオ性〉」としての三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示

ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」）であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）と主観的な「認識的なくラチオ性>」としての徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性に基ついて認識する。「その方は、われわれを、……すべての造られたわれが、その存在を受け取り貸与されており、……完全な明るさの中で……見抜かれ理解されている起源的な創造的なわれとして認識し給う」——「この関係の逆転を前提としているような神認識は、〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいた〕實在の神の現実の認識としては問題となり得ない」、それ故に「われわれが、……お互い同志認識し合う時、このお互い同志認識し合う類比を神認識に対して適用することは、明らかに創造的なわれと造られたわれの間の関係を逆転することに遡らなければならない、……同じように問題となり得ないことである」。すなわち、「われわれは、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて〕神が、ご自身をわれわれに対して、汝および彼として認識するよう与え給う時、与え給うことによって、神を〔その顕現性と隠蔽性において〕認識する」、それ故に「われわれは、神を、神がわれわれを認識し給うようには認識しないし、またわれわれがお互い同志認識し合うようには認識しない」。

そのような訳で、神のその都度の自由な恵みの神的決断による、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神の自己認識〔・自己理解・自己規定〕にあずかるわれわれの参与は、〈まこと〉であり、〈現実のもの〉である」が、「しかし、それは、あくまでもその〈間接的な〉参与である」。「われわれは、〔「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという〈方式〉の下でのキリストにあつての神としての〕神に対して、ちょうど〔被造物である〕われわれが被造物に対して名を与えるように、名を与えることはできない」。したがって、「われわれは、〔区別を包括した単一性において、先ず以て、「第一の問題」である「神の本質の問題」を包括した「第一の問題」である「神の存在の問題」を要求するイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、〕神を〈名〉でもって表示することによって、神が自ら与え給う名を堅く取って離さないでいなければならない」。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神が、自ら名を与え給うということ、そのことは、神の啓示の中で起こる。換言すれば〔「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由な「三位相互内在性」における「失われぬ単一

性]・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の「神が、〔われわれのための神〕としてのその「外に向かって」の外在的な「失われぬ差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）における〕人間との契約の中でなし給うことの中で起こる」。したがって、〔そのことは、キリストにあっての神としての神が、先に述べた〕あの＜聖礼典的な実在＞を設定することの中で起こるのである〔すなわち、そのことは、神が設定された聖礼典的な実在であるところの、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞、詳しく言えば客観的な「存在的なく必然性」と主観的な「認識的なく必然性」を前提条件とした（換言すれば、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいた）客観的な「存在的なくラチオ性」——すなわち三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の実在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観性として客観的に存在している「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の、起源的な、支配的なくしるし」）であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）におけるその「最初の、直接的な、第一の」「啓示ないし和解」の「概念の実在」としての第二の形態の神の言葉である聖書（その「最初の、直接的な、第一の」「啓示との＜間接的同一性＞」において存在している「啓示のくしるし」）、そしてその「聖書への絶対的信頼」（『説教の本質と実際』）に基づいて、その聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした教会の＜客観的な＞信仰告白および教義 Credo としての第三の形態の神の言葉である教会の宣教（「啓示のくしるし」のくしるし）の中で起こるのである〕。われわれが、その彼の名、その諸行為の中で啓示された彼の名を聞くことによって、その彼の名を堅く取って離さないでいることによって、それを呼び求め、それを宣べ伝えるために、その彼の名を用いることによって、われわれは神を認識する。〔その時、〕汝および彼として神は、われわれに知られないのではなく、〔その顕現性と隠蔽性において〕知られるようになる。したがって、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての『神がそこでわれわれに会い給うその恵みの御言葉は〔すなわち、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の、起源的な、支配的なくしるし」）は〕、イエス・キリストと呼ばれる。すなわち、神の子にして人の子、真の神〔神の顕現〕にして真の人〔神の隠蔽〕、インマヌエル、この一つなる方におけるわれらと共なる神である』と、答えうるにすぎない。キリスト教信仰は、この『インマヌエル』との出会いである。イエス・キリストとの出会いであり、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストにおける神の活ける御言葉との出会いである。われわれが〔その「最初の、直接的な、第一

の]「啓示ないし和解」の「概念の实在」（「啓示との<間接的同一性>〔啓示との区別を包括した同一性〕」において存在している「啓示の<しるし>」)としての第二の形態の神の言葉である]聖書を神の御言葉と呼ぶ場合……、われわれは、それによって、〔第二の形態の神の言葉である]聖書を、この神の唯一の御言葉についての(すなわち、イエス・キリストについての、神のキリストであり永遠にわれわれの主にして王なるイスラエルから出たこの人についての)預言者および使徒の証しとして〔すなわち、イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された「預言者および使徒たちのイエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」として、換言すれば「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの神性」——すなわち「権威」と、「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの人間性」——すなわち「自由によって賦与され装備された権威と自由を持つ」「預言者および使徒たちのイエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」として〕、考えているのである。そして、われわれがそのことを告白する場合、われわれが教会の宣べ伝えを神の御言葉と敢て呼ぶ場合〔すなわち、われわれが、第二の形態の神の言葉である「聖書への絶対的信頼」に基づいて、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした教会の<客観的な>信仰告白および教義 Credo（「啓示の<しるし>」の<しるし>）としての第三の形態の神の言葉に属する教会の宣教を神の御言葉と敢て呼ぶ場合〕、それによってイエス・キリストの宣べ伝えが理解されていなくてはならない（『教義学要綱』）。

「そのようにその方は、ご自分の名を与え、またその名の中で、ご自分を与え給う。われわれは、まさにそのことに照らして、……われわれに対し、そこで知るよう与えられるものが、実際に彼の名、神の名であって、被造物の名ではないということ、永遠の、聖なる、栄光に満ちた名、すべての名にまさる名であるということを経験することができるのである——「まさにこのことに照らして、われわれは、〔「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父——啓示者・言葉の語り手・創造主、第二の存在の仕方である子としてのイエス・キリスト自身——啓示・語り手の言葉（起源的な第一の形態の神の言葉）・和解主、第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊——「啓示されてあること」・「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済主なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体)における]その名の中で、〔「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位相互内在性」における「三位一体の」]神ご自身と関わるようになるということを経験することができる。「その名は、まさにそれが〔「自己自身

である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互内在性」における「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の」神の『われ』を、ただ神の汝および彼としてだけ啓示する〔すなわち、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質、起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父——啓示者・言葉の語り手・創造主、第二の存在の仕方である子としてのイエス・キリスト自身——啓示・語り手の言葉（起源的な第一の形態の神の言葉）・和解主、第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊——「啓示されてあること」・「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済主なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）における神の汝および彼としてだけ啓示する〕、それ故に「同時に覆い隠すことによって〔同時に隠蔽することによって〕、〈主〉の名である」。このような訳で、「われわれは、〔神の顕現と神の隠蔽という〕この規定された姿の中で、……またこの限界づけられた姿の中で、……〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての〕神を〔間接的に〕認識するのである」。

「今述べた事情についての明らかな記述」は、「出エジプト三章」の「モーセがヤハウエに出会う出会い」である。「モーセは、ヤハウエの天の使いを見る」——「この〔媒介的な〕形態の中で、〔覆い隠された〕ヤハウエ自身を見る」。「その形態は、……蔓延する火、それでいて焼き尽くさない火、生きており保持されている被造物、そのただ中であつてのその被造物の限界および除去である方の現臨、聖礼典的な実在（二節）である」——「この理解を絶した出来事が、ヤハウエの啓示である」。「テキストは、……モーセがさし当って、被造物的な場所の中での最も理解を絶した出来事をも観察し理解しようとするように、その出来事を観察し理解しようとすること（三節）を強調する。実際、彼の場所と領域の中で、啓示は出来事となって起こる」。「しかし、彼は、そこでご自分を啓示される方によって、燃える柴から、彼の人間的な名でもって、すなわちモーセと呼びかけられる（四節）。この呼びかけは、警告である。……『足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである』（五節）」。「ヤハウエは語り給う。その方は、〔先行する〕彼の先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。「ここで、彼……モーセは、顔を隠したと言われている。『モーセは〔聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「自己自身である神」としての三位一体の〕神を見ることを恐れたので顔を隠した』」。「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方における起源的な第一の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質、イエス・キリストの父なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）におい

て「先祖たちに対して、先祖たちと共に、〔先行して〕行動された方、彼らを召し、導き、救い出され方」——「その方が、焼き尽くす、それでいて保持する、保持する、それでいて焼き尽くす方である」。この時、「モーセは、今や、彼が観察し理解したいと思っているものが、先祖たちに関わったように、彼自身に関わって来られる方であることを知る。まさに彼は、ここで、見るができないこと〔神の隠蔽〕を知る。まさにそれだからこそ、彼は、恐れるのである（六節）」。「そして、〔先行する〕まさにその先祖たちの神として彼に関わり給う方が、彼自身を召し、委任を与えることによって、彼に関わり給う」。「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」中での三度別様な三つの存在の仕方における起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父としての「その方の行為、焼き尽くすことと保持すること、保持することと焼き尽くすことは、彼の奉仕を通して、イスラエルの将来の歴史の中で続いてゆかなければならない」——「ヤハウエは、『下って、彼らをエジプト人の手から救い出し、これをかの地から導き上って、良い広い地、乳と蜜の流れる血に至らせようとしている』（八節）」。モーセの「防衛的な問い」——すなわち、「わたしは、いったい何者でしょう。わたしがパロのところへ行って、イスラエルの人々をエジプトから導き出すのでしょうか（一一節）」という問いに対して、ヤハウエは、「『わたしは必ずあなたと共にいる』と答えられる」、またモーセの「『あなたがたの先祖の神』という……名だけでは不十分であるような」問い（一三節）に対しては、ヤハウエは、「『わたしは、有って有る者』（一四節）と答えられる」。「人が七十人訳に依拠しつつなした『わたしはまことに存在する者』という翻訳は、テキストの文脈の中では確かに不可能である。何故ならば、〔「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互〈内性〉」における「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の」〕神ご自身によってこの名〔「わたしは、有って有る者」〕が与えられることが、確かに、いわば神がモーセに対して、〔「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質、起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事において）ご自身を認識するよう与え給う際の啓示の第三の形態を言い表している時、この第三の形態は〔「わたしは、有って有る者」は〕、結局最初の二つの形態〔「先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」および「わたしは必ずあなたと共にいる」〕の方向で、最初の二つの形態〔「先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」および「わたしは必ずあなたと共にいる」〕の解釈として理解されなければならないからである。『「わたしは、有って有る者』は、あの焼き尽くす、それでいて保持するもの、あの保持する、それでいて焼き尽くすもの以外の何ものでもない、「先祖の神以外の何ものでもない」。「そ

のことを、その箇所の続きが語っている」——「イスラエルの人々が、『誰があなたを遣わしたのか』と問う時、彼は、一四節によれば『わたしは有る』という方が、わたしをあなたがたのところへ遣わされましたと答えなければならない」、「また、一五節によれば、もう一度はっきりと、『イスラエルの人々にこう言いなさい、あなたがたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が、わたしをあなたがたのところへ遣わされました、と。これは永遠にわたしの名、これは代々のわたしの呼び名である』と言われている」。このような訳で、「『わたしは、有って有る者』というのは、人が、その際、動詞を現在形としてとるか未来形としてとるかはとにかくとして、『わたしは、<わたしが>現にあるところのもの』、あるいは『<わたしが>あるであろうところのもの』ということである」。言い換えれば、「そのものについては、そのものが、現にあるところのものであることによって、すなわちそのものが現に行動するように行動することによって、自分で与える定義以外の客観的な定義は存在せず、したがってわれわれ自身によって見出されなければならない定義は存在しないところのものであるということである」。このような訳で、われわれは、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、神のその都度の自由な恵みの神的決断による、ただその「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいてだけしか、キリストにあっての神としての神を〔その顕現性と隠蔽性において〕認識することはできないのである。「われわれは、もう一度、出エジプト三三・一九に注意を向けることにしよう」——「『わたしは恵もうとする者を恵み、あわれもうとする者をあわれむ』。そのように言われており、決してそれと違ったふうに言われていない方、〔「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）における〕その行為の中で自分自身を措定し与え給うところの方、ただ常に新しくその行為を<問う>問いの形でだけその方の存在が<問わ>れることのできる方、その方が〔「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互〈内性〉」における「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の」〕神である。〔したがって、〕そのほかの名は、すべて神の名ではないであろう。また、そのほかのものを認識する認識は、いずれも〔その顕現性と隠蔽性における〕神認識ではないであろう。そのように、決してそれと別様にではなく、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての〕神は人間の前に立ち給う」。